北東アジアの展望で日中関係を考える

ー香港、瀋陽に勤務してー

私のバックグランド

- 私のバックグランドはモンゴル
- ソ連邦についで2番目に古い社会主義国
- →中国、ロシアの知識も必須
- 中国に内蒙古自治区あり、ロシアにブリヤート、カルムィク、トゥバがあり、モンゴルと同様フォローの要有り
- 外務省中国課モンゴル担当として3回勤務→中国理解に資する
- 外国勤務

  香港（中ソ関係、日中関係）3年7ヶ月

  瀋陽（総領事）1年5ヶ月

  ペナン（政治、経済、文化、華僑）1年10ヶ月

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（1）昭和の戦争

①中国侵略

②東南アジア侵略とその植民地宗主国であるヨーロッパ諸国との戦争

③米国及び太平洋地域との戦争

④ロシア・モンゴルとの戦争（ノモンハン事件と終戦直前のソ連、モンゴルの対日宣戦布告）

⑤戦争ではないが、それ以上の対応を日本に迫った朝鮮の統合

（以上を総称して**昭和戦争**とここでは仮称）

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（2）太平洋戦争

1945年8月14日にポツダム宣言を受諾

日本は無条件降伏を表明

9月2日、米軍ミズーリー艦上で降伏文書に調印

太平洋戦争終結

連合軍の進駐軍駐留→米軍駐留→今日にいたる

1951年9月8日サンフランシスコ平和条約を締結

日本を含む49ヵ国が調印→調印国との国交が正常化

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（2）サンフランシスコ平和条約

1951年9月8日、49ヵ国調印

- 東アジア　5ヵ国→ヴェトナム、ラオス、カンボディア、フィリピン、インドネシアといずれもヨーロッパの旧植民地
- 南アジア　2ヵ国
- 大洋州2ヵ国
- 西アジア　6ヵ国
- アフリカ　4ヵ国
- ヨーロッパ　7ヵ国
- 南北アメリカ　22ヵ国
- 日本

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（3）サンフランシスコ平和条約　（続き）

- 日本を取り巻く北東アジアはサンフランシコ平和条約に含まれていない。
- 中国
- 韓国
- 北朝鮮
- モンゴル
- ロシア

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（4）韓国・北朝鮮

- 韓国とは1966年「日韓基本関係条約」を締結

- 北朝鮮とは2002年の「日朝平壌宣言」で外交関係に向けた交渉のスタートラインに立っている

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（5）ロシア・モンゴル

- ロシアとは1956年「日ソ共同宣言」により国交は回復
- 北方領土の返還がないので、1945年8月9日のソ連の宣戦布告にもとづく戦争終結の平和条約は現状では見込みなし。

- モンゴルとは1972年の「外交関係樹立声明」で外交関係を樹立することを優先し、外交関係を有しながら1977年の「日本モンゴル経済協力条約」で問題を解決。

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

(6)中国との媾和

1952年4月8日台北で日華平和条約に署名
当時国交を有した国民党政府との間で締結

中国の大部分をしめる中国本土との媾和は共産主義政権あることを理由に実現せず

↓

1972年9月29日田中訪中により国交回復

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（7）イデオロギーの相違は国交の障害か

相手国の信条による国際差別、忌避、乃至地政学的アプーチの欠如

↓

危険なことあり

↓

その政権を国際孤児に育ててしまう

例、北朝鮮

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

- 外交場裏でイデオロギーがまったく関係ない場面を経験

① 社会主義時代のウランバートル

○ グループA：モンゴル、ソ連、東欧、キューバ、インド

○ グループB：英国、日本、中国、夏場だけ開館のフランス

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（8）ニクソンショックはショックだったか

①　バンドン会議

日中間の接触は1955年4月バンドン会議での会談に始まる。

高崎達之助元経済審議庁長官が周恩来総理と会談

周総理より日中の漢字簡略化にさいして同じ文字の採用を提案

中国側より廖承志氏（中国共産党対外活動の責任者、後に中日友好協会会長）が同席

岡田晃元スイス大使（元香港総領事）が通訳

1.中国との関係正常化について若干考えていたこと

（8）ニクソンショックはショックだったか

②　バンドン会談の帰結

1962年11月「日中長期総合貿易に関する覚え書き」（LT協定）を締結、相互に連絡事務所を設置

半官半民の貿易を開始

これは1968年3月、古井喜実氏が訪中して覚書「貿易会談コミュニケ」を調印、MT貿易Memoranndum Tradeと改称され1973年まで継続

1.中国との関1係正常化について若干考えていたこと

（8）ニクソンショックはショックだったか

- 岡田総領事は米中接近について予兆があると報告
  →政府見通しはこれを否定
- 1972年2月ニクソン訪中

- 大きな流れとしては、日本はバンドン会議以来の積み重ねがあり、政権の決断の問題。
- 親台湾の岸首相では決断できず、田中首相になり決断できた。

2.　香港総領事館で日中関係を担当

(1)　香港勤務

1968年岡田総領事ご赴任直前ご指名を受け突然香港勤務を命じられ、総領事に遅れることやく1ヶ月で12月初め赴任

(2)　香港総領事館

香港総領事館には調査室が2室あり、国交正常化後北京に大使館が開設されたら政務班となり得る機能を有していた。

総領事館の調査室に分室あり

中嶋嶺雄（後に東京外国語大学学長）、石川忠男（後に慶應大学塾長）、坂本是忠（後に東京外国語大学学長）、今堀誠二（後に広島女子大学学長）、山田辰男（後に慶應大学法学部長）など中国関係の錚々たる学者たちが特別研究員として勤務

2.　香港総領事館で日中関係を担当

(3)　日中関係担当

着任直後は、モンゴルとの関連で、中ソ論争（中ソ両共産党の国際共産主義運動のヘゲモニーをめぐる理論闘争）および中ソ対立につき、フォローしていたので、中ソ関係を担当、着任3ヶ月で1969年3月中ソ国境紛争始まる。

中ソ双方の主張、論理、戦略、戦術の分析にあけくれ、ロシアの専門家新井弘一室長（後の東欧第一課長、最後の駐東独大使）のご指導のもと作業を進めた。

一段落した段階で体調を崩し、比較的暇な日中関係に担当替え→たちまち日中関係が動きだす。

2.　香港総領事館で日中関係を担当

(4)　水鳥外交

岡田総領事の「水鳥外交」について

同氏のご著書『水鳥外交秘話』に詳しい。

私1人を手下において、お1人で進めておられた。もちろん末席の私が水鳥外交のサブスタンシャルな面にタッチできることはなかった。

調査室には外務省のトップを行く中国通の専門家の方々が10名近くいた。しかし、国交正常化前の香港で総領事について日中関係を担当していたのは私1人。→総領事は中国専門家に知られることなく、一人で進める覚悟。私は秘書的役割。

2.　香港総領事館で日中関係を担当

（4）水鳥外交

バンドン会議で通訳を務められた岡田総領事は、終始バンドン精神でおられた。水鳥外交の方向は北京の周総理、廖承志氏。なんとかして大陸中国と関係づける糸口を探っていた。

「大公報」などの紙誌のトップや、北京につながりそうな各界のトップ、東亜同文書院や、上海の国立中央大学時代の同窓生をたよって仕事を進めておられた。

同時に本国政府の幹部と直接やりとりして、ついに佐藤総理の特命で動き、中国との意思疎通をはかろうとしておられた。

2.　香港総領事館で日中関係を担当

1（4）水鳥外交

岡田総領事の北京との直接連絡が功を奏するかの直前北京の動きが止まって、岡田工作は中止となった。

後に「林彪事件」と呼ばれる中国共産党中央委員会副主席による毛沢東主席暗殺未遂事件が発生。

林彪は急ぎ、トライデント機で国外逃亡という前代未聞の事件が、発生した。同機は1971年9月13日夜、モンゴルのヘンティ県に墜落した。このため、岡田総領事の工作は頓挫してしまった。

2.　香港総領事館で日中関係を担当

1（4）水鳥外交

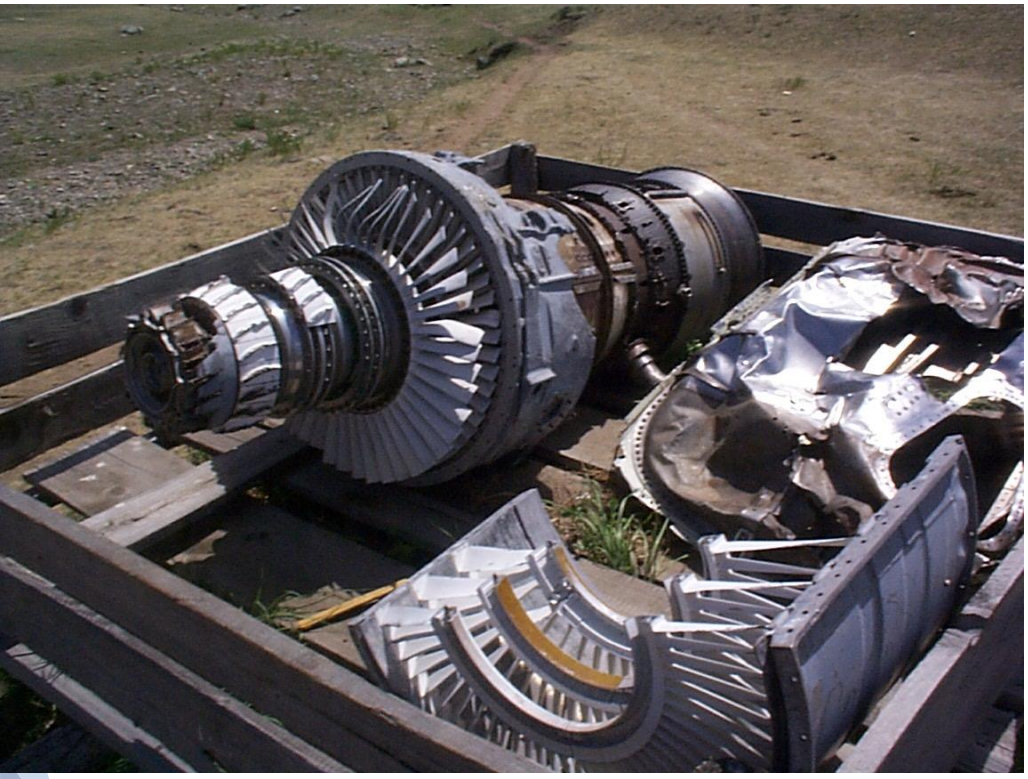
そのころモンゴルとの外交関係樹立の話も進んでいた。日本が派遣した親善使節団に参加するため、9月私は香港からインド、モスク経由ウランバートルに飛んだ。

9月13日使節団一行が乗車したVIP夜行列車が走行中、付近のヘンティ山脈に林彪の国外脱出のトライデント機が墜落する事件が発生

アテンド中のモンゴル外務省ツェレンツォードル局長が担当局長として列車からヘリに乗換え、現場に急行。

林彪機のエンジン残がい

- 2000年6月9日ウランバートル市空港北側付近で花田撮影



3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

(1)　元上司の言葉

1998年4月瀋陽総領事に任命され赴任

赴任挨拶に退官された元上司に挨拶したときにいただいたアドバイス

「旧満州は日本が傷を与えたところだ。なにかすれば、やられるし、石をなげられるかも知れない。何もするな。じっとしていろ。そこに総領事館があるだけで意義がある。」

目の当たりにした現実はまったく異なった。結論から言うと当時の中国東北は諸問題はあったが、これから発展する前夜で、明るく、希望にあふれて、活力のある場所であった。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（2）中国東北と日本　瀋陽総と大連

遼寧省瀋陽に総領事館があり、大連に瀋陽総出張駐在事務所があった。

瀋陽が政治都市とすると、大連は経済都市。
日中間を含めてイベントが多く、短い在勤中に11回も出張せざるを得なかった。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（2）中国東北と日本　大連市と北九州市との連携

大連市と北九州市との連携が進んでいた。

大連市長との意見交換は楽しみであった。大連市の開発について情熱を傾けて話されていた。

北九州市も見違えるように今発展しており、地域の市どうしの連携は将来を見据えて着実に発展していると思った。

このような関係が日本と中国、韓国を含めて発展していくことに希望が持て、明るい未来が予測された。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（2）中国東北と日本　都市館連携

瀋陽総の企画：「友達の友達は友達」作戦

目的：韓国も含めて、日中韓の沿岸諸都市でお互いの姉妹都市を結び、ネットワークを構築して、共通の問題を解決する→やがてはEUのような市場が形成されればとの淡い期待。

中国都市と姉妹都市の関係にある北朝鮮の都市も参加してきて驚いた。これを拒否する愚はさけ、受け入れ、大いに盛り上がり、あの熱気はわすれられない。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　中高一貫校

公邸のイベントに使用する花を購入するため妻が花屋にいくたびに、ある中高一貫校の校門付近には生徒を迎える高級車などがひしめいているというので、確かめにいくと壮観なものだった。

年間の月謝が日本円で100万円近いという。このような一貫校は瀋陽市付近に20校あるという。

車での帰宅の理由、早く自宅に帰り家庭教師について勉強するため。→時間のロスを恐れる。塾は往復の時間が無駄。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　中高一貫校

給与と私立の中高一貫校の月謝のバランスが悪いので、そのように高額な月謝がなぜ支払えるのか、ある時友人に率直に聞いてみた。

回答：もちろん給料と収入は違うのであり、たとえ賃金がそのようでも、収入はもっと上である。都市の中流男性で給料の4から6倍の収入がある人が少なくない。夫人も2から4倍の収入がある。

夫婦二人の収入で一人っ子を一流学校にやることは楽ではないが困難なことではないとの説明を受けた。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　生活実態（吉林省）

2003年3月ERINAの組織した出張で中国東北の吉林省を訪問した際、再び給与と収入の関係に関して質問を試みた。

吉林省のかなり大きな地方都市の経済貿易委員会の副主任が私の賃金は月に1400元（当時約20100円）であり中国では中の下であるが、私の収入による生活は欧州の平均的生活水準にあり、食べ物はおそらく欧州の人々をしのいでおり、私たちの収入について日本の方々は誤解している旨述べた。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　生活実態（吉林省）

同地の自動車の部品工場の工場長は、私の年収は8万元（115万円）であり、親子3人の収入を合わせれば生活のことをあまり考慮せずとも車を買うことができる。今公用車が与えられているので車に困っておらず買わないだけ。

因みにこの工場が製品を納めている自動車工場は7，8人乗りの小型ワゴン車を製造していたが、このワゴン車の販売価格は28000元（約402000円）から35000元（約503000円）で、これは手の届かない値段ではないとのこと。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　東軟集団（瀋陽にある東北工学院が主体となった企業）

東軟集団はもっぱらソフト開発をする会社

広い部屋一杯にパソコンを前にした従業員がソフト開発を行っていた。

江澤民党総書記が訪問したニュースを後に見た。「この企業を全国は見習い、国中に広めたい」述べていた。同企業の優位性が失われないか心配になった。

広い芝生の領域にところどころスプリンクラーが水を撒いていた。ゴルフコースもあり、瀟洒な倶楽部ハウスがあった。大卒の賃金は月に3000元前後、大学院卒は5000元前後。領域に散在する瀟洒な2階建て戸建て社員住宅。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　哈爾濱でのこと

黒龍江が氾濫したことがあり、哈爾濱にお見舞いを兼ねて現場視察に行った。ハルビン市の担当課より洪水被害が見えるホテルでの説明があった。終了してお茶になり5－6名の課員を観察していると、課長も課員もへだてなく呼び名で呼び合い冗談を言い合い、洪水の水かさについてああでもない、こうでもないと言い合っていた。

経験した日本の在外公館では、館長以外、めったに発言しない。

最近北京でのテレビ中継で北京の熟年女性が、西側より中国の方が民主主義がある。われわれは人民の民主主義だと言っていた。哈爾濱を思い出した。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（4）遼寧省経済関係幹部から期待されたこと

遼寧省である幹部は、「中央から人が来れば遼寧は地方だが、その方が北京に帰れば、東北三省+内蒙古自治区は独立した経済圏である」と述べた。また、「日本は戦後、中国の南ばかりに投資しているが、東北には投資しない。東北は日本の旧植民地（ママ）だったからか。こんなことなら、英国の植民地になった方がましだった。英国は旧植民地の面倒をよくみているそうだ。」このような耳を疑うようなことを聞いた。

日本は旧満州を避けるのではなく、また上から目線でなく、中国の現実を認め、卑屈になることなく北東アジアで協力する方策を講じることが大事でなかろうか。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（4）遼寧省経済関係幹部から期待されたこと

異動発令で帰国することになり、現地中国共産党の書記長が新しいビルの自室にわれわれ夫妻を招かれ、自らお茶をたてて下さった。自分はだれにもそのようなことをしたことないが、帰られる前に是非この上等なお茶を味わって欲しかったからと申された。

「モンゴル大使となっても瀋陽を忘れず、モンゴル、瀋陽、日本連携の仕事をやって欲しい」

退官後NPO「北東アジア輸送回廊ネットワーク」の立ち上げに参加し、10年間会長としてがんばったのも彼の言葉があったから。共産党だからと嫌悪せず中国の政権党であるとの認識で対応すべきと思った。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離　私見

中国は今世紀前には、豊に変化しつつあった。

最近突然豊になったように見えたが、すでに当時から徐々に社会変化があった。実地に見て報告したが、だれも信じなかった。

なぜ信じないか。

①それまでの相場　②中国を低く見る習性

この二つに目がくらんだのだのではなかろうか。

今後はありのままの中国を虚心坦懐に見て理解するのが重要、親中でも反中でもない正確な観察にもとづく相互理解を重視すべきではなかろうか。

3.瀋陽総領事館で日中について考えたこと

（3）中国の実態と日本の認識の乖離

辺彊には格差がある

ただし、誤解なく言えば辺彊には、当時苦しい実態があった。格差が、民族的格差のように見えた場合があり、外部の立場でどのように関与するかが問題。

わたしたちは周辺地域の少数民族にも注意を払い、人道的観点から隣人として対応するのがよいのではなかろうか。

中国の朝鮮民族が居住する国境地帯の「龍井市三合鎮中心衛生院」に草の根無償で医療器具の支援をした例。

ときに北朝鮮の市民が川を渡り受診に来ることがある。支援を受けた医療器具を使用してよいかとの質問。人道に国境はないと思い、「皆さんは川を越えてまで来た人を助けないのですか」と逆に質問したら安堵の様子。

龍井市三合鎮での草の根支援医療器具引き渡し式

4.北東アジアで日本が、外せない視点

（1） 日本は地政学的に北東アジアに位置、韓国・北朝鮮とは弥生時代から、中国とは2千年以上の交流があることを忘れない。

（2） 対中貿易は対米貿易を大幅に上回わる。お台所を御世話になっていながら、政治では排撃することははおかしい。

（3） 対中関係がこじれたときは二国間で改善をはからず、北東アジアの枠組みで知恵をだして解決する。

（4） 日中は、親中、反中で判断せず、この北東アジアの地域で日本国民が平和で安全な環境を確保して、幸せに暮していけるよう日本国憲法にのっとり築くことに資するかどうかで判断する。